

## 筑波大学構内におけるヒートアイランド の立体構造について

田 口 厚 志 (自 然 学 類)  
河 村 武 (地 球 科 学 系)

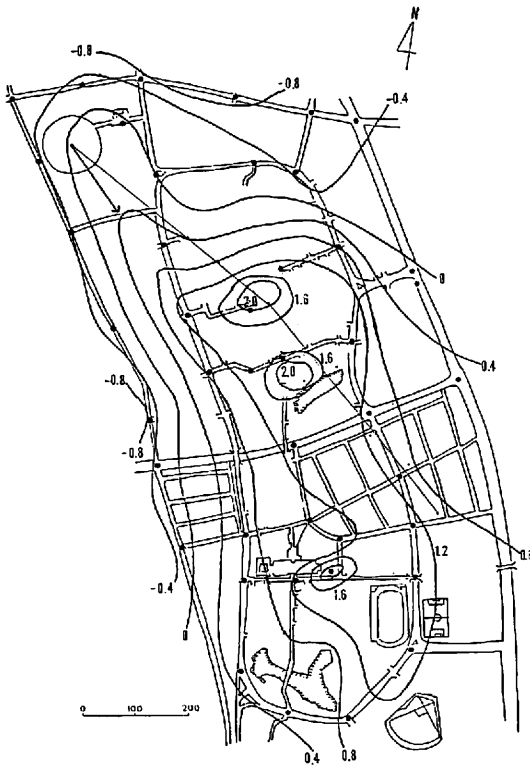
ヒートアイランドは都市気候現象中、最もよく知られた現象であり、これまでに数多くの研究がなされている。ここでは、1981年2月10日から2月11日、7月10日から11日の二晩、筑波大学周辺で行なった観測をもとにまとめてみた。

第1図は、ヒートアイランドが最も顕著に出現した例であるが、高域温は第一、第三学群棟周

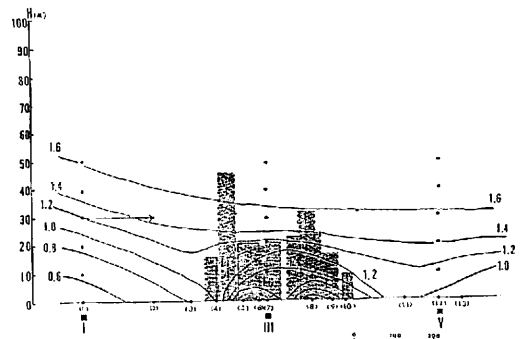
辺、体芸棟周辺に現われている。高温域と低温域の気温差は約3℃に達し、ヒートアイランドがかなりはっきりと現われている。

第2図は、第1図と同じ時刻のものを立体的にみたものである。これによれば、建築物密集地に対応して、高温域がはっきりと見られる。また、この高温域の上限は60~80m前後と考えられ、建築物の平均高度を20mとすれば、建物の3~4倍まで影響が及ぶものと考えられる。

以上、コンクリート建築物が密集している地域では、面積がそれほど広くなくても(約 $5.2 \times 10^{-2}$  km<sup>2</sup>)、平面的にも、立体的にも、ヒートアイランドがかなりはっきりと出現することがわかる。



第1図 筑波大学構内における気温平面分布 (1981年2月11日1時30分)



第2図 気温断面図 (1981年2月11日1時30分)